



# 絵本と能

Picture Book and Noh Play

永田円了

物事の本質を捉えようとするなら、そのものに何か全く異なるものをぶつけてみることである。絵本と能、この一見全く異なるものを並べてみることで、それぞれのもつ特異性が浮き彫りにされる。さらに進めると、その共通点が見えてくる。

日本は絵本大国である。半世紀以上売れ続けるロングセラーもある一方で、年間 1,000 冊の新刊が出版されている。『いないいないばあっ!』は、現在 735 万部を超えるロングセラー絵本として、世代を超えてよみつなされる。一方日本芸能の代表的な「能」は、室町時代中期に誕生し、600 年もの年月、その形を一切変えず受け継いでいる。

## 子どもの目（絵本）、大人目（能）

絵本は子どもが読む本ではない。大人が子どもに読み聞かせるためのものである。読み聞かせてもらうことで、子どもたちの心の中に生まれる生き生きとした物語世界ができる。その体験は、人間の生きる力を支え、日常の世界の本質を見抜く力も与えてくれる（児童文学者・松居直）。

私事ながら、父は禅坊主でありながら、毎晩コナン・ドイル作『シャーロックホームズ』全集を読んでもらった。この絵本体験が今の自分を創ってくれたと言っても過言ではない。当時おそらく、父親から発せられるコトバを目をまわして聴き、行ったこともないロンドンの風景を想像したことであろう。



耳からコトバを聴き、空想の世界で遊ぶ。コトバというのは、話しコトバが先にあり（約 7 万年前）、その後（4 千年ほど前）それを表す文字が発明されたのである。子どもの目はまず耳から入り、語られる物語に純真な心が動き、ちっぽけな頭の中に大宇宙を覗く。その時に、子どもの内面が育つ。それが絵本体験の本質なのであろう。

一方「能」の世界を理解するためには、大人目が必要となる。最少の動きで人の内面を表し、能面で顔に蓋をすることによって、人間の内面に気を集中させる。その内面を見抜く成熟した“大人目”が要求される芸術である。子どもには到底理解しようのない、深淵さをもつ「能」の芸術性は、しかし、大人のもつ既成概念を排し、素直なレンズでみる“子供の目”がないと、「能」の美しさは分からないという（映画監督・黒澤明）。

人生を終えて、すべてを見通すことができる立場でものを見る“死者の目”を、現実の中にもってくるという作業を、能はしたのではないか（免疫学者・多田富雄）。十数年前に真国寺墓地内で首吊り自殺をされた男性の顔を近くで見たと、ハッとした。まさに能面の顔だったからである。非業の最期を遂げた人を、もう一度この現生の舞台上で花を咲かせてあげる、このやさしさが「能」にはあるのではないか。

感覚で生きるか、理屈で生きるか。感覚で生きる動物は、日々新た（養老孟司）

### <事例>

『道元の冒険』井上ひさし作、蜷川幸雄演出、心の眼をチェック  
養老孟司、感覚で生きるか、理屈で生きるか、  
松居直（ただし）、児童文学者、絵本体験 ころの時代「言葉の力 生きる力」  
絵本『ありがたいこつてす!』ユダヤの民話、マーゴット・シェマック作  
五味太郎、絵本作家、子どもの絵本から、大人が学ぶ  
そして「能」は生まれた、NHK「歴史秘話ヒストリア」  
免疫学者・多田富雄、能とは死者の目を現実にもってきたもの  
黒澤明と能、美しいものは説明できない、能の美もまた同じ  
小林秀雄、「美しい花がある。花の美しさというものはない」  
「拈華微笑」（ねげみしょう）、釈迦はただ花を拈りたかっただけ  
歌・舟木一夫『夕笛』西城八十作詞、船村徹作曲

円了のホームページ: [www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)



絵本作家